

皮心伝心

乳房外Paget病における「背信の科学者たち」

STAP細胞騒動の後、ある絶版本が再版された。「背信の科学者たち」(講談社)である。科学論文に捏造が如何に多いかと驚く。稚拙なレベルに留まらず、メンデル、ガリレオ、ニュートンにも指摘は及ぶ。勿論、この小欄は書評ではない。述べるのは、乳房外Paget病(以下、EMPD)という狭い世界も同様だということだ。

「EMPDの肉眼的範囲を越えて腫瘍細胞が存在する」ことの根拠とされるのは、Vulvar Paget's disease : a topographic study (Gunn RA., Gallagher HS. : Cancer 46 : 590, 1980)である。超一流のジャーナルで、出所はM.D.Andersonの病理部だ。4例のvulvectomy手術材料を細かく全割し、検鏡結果を病理マクロのゼロックス・コピー紙上で再構築した。その結果全例で上記の結果であり、その隔たりは幅広いと述べた。図からは、広い切除範囲の、かなりの部分にPaget細胞陽性であったとわかる。一方、「肉眼的病巣」はごく小さく描かれている。つまり、肉眼的境界よりも遥か遠くまでPaget細胞が存在するとした。一見、明快な方法と結論である。

しかし、よく吟味して読むと分かってくる。①「肉眼的」病変のサイズは、1例は1×5 cm、別の1例は2×3 cmである。この小病巣に対する広範囲なvulvectomyの施行を、外科医が本当に行ったか？ 39歳の女性がその手術を納得したのか？ 当然、否であろう。その例のゼロックス・コピー写真からは、実際の肉眼的病巣は、Gunnの示す小範囲より実は広く、病理結果にむしろ一致すると推測できる。すなわち、Gunnの「肉眼的」境界は、コピー紙上での誤認であり、手術医の判断ではない。②Gunnの肩書きはfellow in pathologyとのみ記載され、Gallagherは病理学の教授である。が、実際に診療した外科医は共著者になっていない。肉眼的境界を判断し、それに沿って手術を施行した医師が、この重要な結論に共同責任を負わぬのは異常である。③共著者Gallagherは、この5年前に他論文で「浸潤のないEMPDは局所切除で十分対応でき、vulvectomyは必要ない」と述べていた。今回は真逆な内容であるのに、それについての考察はない。

「EMPDには他臓器の癌が合併しやすい」との命題で常に引用されるのが、Extramammary Paget's disease : prognosis and relationship to internal malignancy (Chanda JJ. : J Am Acad Dermatol 13 : 1009, 1985)だ。本症の36件の論文を引用し、197例中12%で1年以内に内臓癌が発見されたとの内容だ。引用文献を全て読んでみた。9件は単なる一例報告であり、背景症例の記述はない。別の3件は肛門例だ。故に「頻度を割り算で算出しているが、その母数となるべき分母が正しくない」ことは、誰にでも分かる。

捏造ともいえぬ程度なのだ。著者の力不足故の誤報が、世界的ジャーナルに掲載され、引用され続ける。ガイドラインでも根拠となる論文とされる。よくいえば「お人好し」の世界だ。何を小さなことに目くじらを、といわれるだろう。しかし、これらの論文を放置すれば、誤解を継続させることになるのだ。

村田 洋三

(神戸市立医療センター中央市民病院皮膚科
前兵庫県立がんセンター皮膚科)